

# 原発事故に脅える日々から解放を！

## 意見陳述書



原告 小手川美咲

1) 原告の小手川美咲と申します。私は、原発事故をきっかけに2013年1月に神奈川県から母と妹と猫の一家で移住してきた26歳の会社員です。福島原発事故前も、事故後しばらくの間も、原発に全く関心がありませんでした。そんな私が、縁もゆかりもない大分県に移住し、原告になった経緯をお話しさせていただきます。

2) 関東に放射能が降り注いだ2011年3月15日と21日、大学2年生だった私は、屋外にいました。マスクもせず、雨にも濡れました。事故後、海外ではすぐに公表された放射能の情報が、日本では隠され、私たちは、知っていたらできたはずの被ばく対策をとることができませんでした。今では、そのことに関する報道はほとんどなく、なかったことのようにされています。しかし、私は、一生忘れません。

放射能が降り注いだそのことに、いち早く気づいたのは妹でした。しかし、東京まで通学していた私は、妹が原発や関東の汚染の話をするのが嫌で仕方ありませんでした。汚染の現実がなかったかのように、放射能が降り注いでいないかのように暮らしたかったです。

しかし、現実を突きつけられる出来事が起こりました。2011年8月、大学3年生の時、体中に赤い水ぶくれのような湿疹ができ、その一部は黒く変色し、ほくろとなって残るといった症状が現れました。生まれて初めての症状に怖くなって、すぐに家族に見せました。病院で診察を受けると、お医者さんからは「原因不明」と言われました。

もしこの症状が未来の自分への警告だった

としたら、そう考えたら、とても怖くなりました。この日を境に空気、食べ物、飲み物、全てに「目に見えない危険」があるように感じ、とても生きづらくなりました。友人と外食をしてお喋りするのが大好きだったのですが、それもできなくなりました。当たり前に行っていた呼吸すら怖いと感じる日が来るなど、夢にも思っていませんでした。

この頃から、自分は、原発や放射能の知識を求めようになりました。ウクライナではチェルノブイリ原発事故から22年後の2008年時点で約8割の子どもが病気を持って生まれていることを知りました。また、アメリカの有名な機関誌「米国科学アカデミー紀要」に掲載された日本の放射能汚染図を見て、放射能はどこまでも飛ぶという現実を目の当たりにしました。

私は、これらの知識を得て、ただただ怖くなりました。そんな私に、母から「あなたたちの子どもに何かあったら、お母さんは死んでも死にきれない。」と涙ながらに言われました。その時、自分の命は将来の子どものための命でもあることに気づき、私は、移住を考え始めました。

3) しかし、移住するかしないかは、簡単に決断できる問題ではありませんでした。自分は関東で就職しようと思っていました。また、母子家庭でお金もないのに持っているほぼすべてのお金を費やして九州に行くことに意味はあるのか、と悩みました。大好きな人たちと離れ、知り合いがいない移住先で抱えるストレスのことも不安でした。

その後も、原因不明の湿疹は増え続け、2012年7月、大学4年生の時、ウイルスによる

病気で2週間入院しました。その病気は、免疫力が高ければ入院しなくても自然に治る病気だったので、なぜそこまで悪くなったのか自分にもお医者さんにもわかりませんでした。もしこれが放射能によるものだったら、私は10年後健康でいられるのだろうか、と怖くなりました。

こうしている間にも、福島原発からは、ずっと放射性物質が風向きによっては関東に流れているというスイス気象局の放射能拡散予測を見た時、私は、もう関東には住めないと思いました。移住するかしないかを悩んでいる場合ではないと思いました。こうして私は、移住を決意したのです。

4) すぐに移住先を探し始めました。移住の相談に乗ってくれた知人に勧められ、別府を訪れました。別府の海沿いや鉄輪の湯煙といった、別世界の風景に一目惚れし、移住を決めました。温かい人達のおかげで住む場所も仕事も決まりました。この大分県は、昨年結婚した私にとっては、まさに第二の故郷です。今では一生大分県で暮らしていきたいと思っています。

ですが昨年、伊方原発が動いた知らせを聞いた時、言葉では言い表せられないほどの恐怖を感じました。地震、テロ、ミサイルなど、事故が起きる可能性はゼロではありません。伊方原発が事故を起こし、大分県が汚染され、自分や自分の大切な人の健康がむしばまれていくことを想像すると目の前が真っ暗になります。もう近くの湧水を汲みに行ったり、温泉に入ったり、鶴見岳に登ったり、大分の新鮮な野菜や魚を食べられなくなると思うと心臓が痛くなります。次は私はどこに逃げれば良いのでしょうか。もうどこにも逃げたくありません。

5) 裁判官の皆さんにも、きっと私と同じように大切な人、守りたいものがあると思います。伊方原発が爆発した時、私たちは、その人を守れるのでしょうか。原発が停止して大切なものを守れるなら、安心して暮らせるなら、これ以上の幸せはないと思いませんか。

6) お願いします。どうか、私達を助けていた

だけないでしょうか。大分県の人々を、原発事故で苦しむ全ての人達を助けてください。どうか原発事故に脅える日々から解放してください。何故、一度きりの人生を、今の暮らしが終わってしまうのは「今日かも。」「明日かも。」と脅えながら生きなければならないのですか。

もし、願いが一つだけ叶うなら、放射能が降り注いだあの日以前に戻してほしいです。でもそれはできません。だから、もう二度と同じ悲劇が繰り返されないように、原発を止めるしかないと思っています。

(5月11日 第4回口頭弁論より)

参 考 資 料

関東地方で通常の100~20倍の数値



(大分合同新聞 2011.3.16)

関東地方で2011年3月15日、通常より高い放射線量が観測された。北風が強かった午前中は、原発の南側にある栃木や茨城、群馬、千葉、東京、神奈川の各都県で場所によっては、通常の100倍から20倍という高い数値を記録。各地の高い数値は放射性物質が風に乗って拡散した結果と見られる。